

## 書評

### ベトナムでの苦い経験は生かされなかった！

松田 教男  
SRID 幹事

クレイグ・ウイトロック著 (訳：河野純治)、2022、「アフガニスタン・ペーパーズ — 隠蔽された真実、欺かれた勝利」、岩波書店 (Craig, Whitlock. (2021). *The Afghanistan Papers: A Secret History of the War*. New York: Simon & Schuster, Inc.)

アフガニスタンでタリバンが政権を奪取してから 1 年数か月が経過した。アメリカ政府などが支えたカルザイ政権とそれに引き続くガニ政権が倒れたのは何故なのか。本書はその疑問を解き明かしたものであり、どこが間違っていたのか、3 人の歴代大統領とその政権がいかに真実を語らなかったのかを説明している。概略のストーリーは以下のとおりである。

2016 年夏、「ワシントン・ポスト」のベテラン調査報道記者であるウイトロック (本書の著者) は、世間あまり知られていない連邦機関、アフガニスタン復興担当特別監察官 (SIGAR) 事務所が、戦争に関わった数百人にインタビューを行い、その多くの人々が積年の鬱憤を吐露したという情報を入手した。SIGAR は、アメリカ政府が将来間違いを繰り返さないように、アフガニスタンでの政策の失敗原因を突き止めることを目的に、「学んだ教訓」というプロジェクトを実施した。2016 年 9 月にはプロジェクト報告書の発行を開始したが、ウイトロックが耳にしていた厳しい批判や指摘は省略されていた。そこで著者は、法に基づいて SIGAR に詳細情報の開示を要求したが、その要求への対応は終始偽善的なものだった。「ワシントン・ポスト」は報告書を全て公開させるために、二つの連邦訴訟を起し、3 年間の法廷闘争の後、SIGAR はついに、将軍、外交官、労働者、アフガニスタン政府当局者まで、戦争において直接的な役割を果たした 428 人のインタビューの未発表メモ 2,000 ページ以上を公開した。

公開資料からは、この戦争の計画には致命的な欠陥があり、アメリカはアフガニスタンを近代国家に作り変えようとして数十億ドル (関連費用を含めると 1 兆ドル超) を浪費したことや、蔓延する汚職を抑制し、優秀な国軍と警察を構築し、同地で盛んなアヘン取引に打撃を与えるというアメリカ政府の取組みが完全な失敗に終わったことが明らかとなった。インタビューを受けた多くの人々が、アメリカの国民を故意に欺くため、アメリカ政府が明確かつ継続的に尽力したと語った。例えば、カブールの軍司令部とホワイト・ハウスの高官たちが、最初から戦争でしくじり、失敗を犯していたにもかかわらず、さもアメリカが戦争に勝っているように見せるために、日常的に統計を歪め、誤判断や誤算を重ねていた。初めからまともな戦略や戦争計画ではなく、戦争当事者も自分たちが何をしているのか皆目見当がつかなかったと述べるなど、驚くべき状態で 20 年にもわたり戦争を続けていたことが分かる。この間 775,000 人以上の米兵がアフガニスタンに派兵され、うち 2,300 人以上が現地で死亡し、21,000 人が負傷して帰還

するという悲惨な結果に終わっている。

ウイトロックによれば、「学んだ教訓」のインタビュー結果は、国防総省によるベトナム戦争の極秘の報告書である「ペンタゴン・ペーパーズ」に酷似していた。1971年にリークされた「ペンタゴン・ペーパーズ」により、ベトナム戦争に巻き込まれるに至る経緯について、アメリカ政府が長い間嘘をついていたことが明らかとなり、一大センセーションを巻き起こした。秘密を保持するため、当時のロバート・マクナマラ国防長官は記者やジャーナリストが関係者に取材することを禁止した。一方、「学んだ教訓」プロジェクトは、そのような制限に直面することはなく、関連文書は当初はどれ一つとして、国家機密には指定されていなかった。しかし、ワシントン・ポストが公開するよう迫ると、他の連邦機関が介入し、後にいくつかの資料を機密扱いにした。ウイトロックはそのうちの何百もの機密扱いのメモを入手した。それらには、「雪片 (snowflakes)」と呼ばれていたラムズフェルド国防長官が2001年から2006年にかけて部下に対して、毎日のように口述した簡単な指示やコメントが含まれる。雪片の多くは、10年以上後になっても米軍を悩ませ続ける諸問題を予見していた。例えば、同長官は「アフガニスタンでは誰が悪者なのか全く分からない」と戦争開始2年後、諜報責任者に当てたメモで不満を述べている。

ウイトロックはまた、非営利の外交研究訓練協会がカブールのアメリカ大使館勤務の職員に対して行った口述歴史インタビューもいくつか入手した。これらのインタビューは、ワシントンがアフガニスタンについて根本的に無知であり、戦争の取扱いも誤っていたという、外交官たちの率直な見方を示していた。他方、何年もの間この戦争を殆ど無視してきたアメリカ議会は、プロジェクトの調査結果を議論し討論するために複数の公聴会を開き、そこでの証言の中で、將軍や外交官その他の高官たちは、政府が国民に対して正直でなかったことを認めている。他にもウイトロックは、アフガニスタン勤務後に退役した軍人600人以上へのインタビュー、米陸軍戦史センターが実施した口述歴史インタビュー、バージニア大学のミラー・センターが行ったブッシュ政権で働いた約100人（主要行政官、外部顧問、議員、外国の指導者等）へのインタビュー結果なども入手し、異常なほど率直かつ正直な応答ぶりから、この戦争の実態は国防総省の高官たちが広める話とは全く異なるものであったことを確認した。こうした膨大な時間とエネルギーのかかる活動を通して真実に迫ろうとする著者の不屈の精神と努力には、驚きを感じるとともに頭が下がる思いである。

著者による結論は、インタビューを受けた人々は、アメリカ国民に伝えられた戦争についての公式情報が真実ではなく、良くて部分的に削除されていることを知ってはいた。しかしながら彼らの中には、公の場で、国民がかつて圧倒的に支持していたこの戦争で、アメリカがゆっくりと敗北に向かっていることを認める勇気のある政府高官は殆どおらず、軍指導者と政治指導者は、お互いに沈黙することによって、説明責任を回避し、結果を変えたり、紛争を早期終結させる可能性があった戦略の見直しを避けたりし、代わりに、自らの過ちを隠蔽し、戦争の流れに任せることを選んだ、というものである。

ベトナム戦争、イラク戦争とそれらの後の統治への介入、ジョージア、キルギス、ウクライナの「カラー革命」や中東各国の「アラブの春」への介入、いずれにおいてもアメリカは現地の事情や国民感情、国の歴史、社会、文化、民族、宗教などへの理解が全く欠けており、自分たちの価値観を一方的に押し付けるという大国にありがちな間違いを犯して、現地に大きな混乱や不安定をもたらしてきた。アフガニスタンについても同様で、アメリカ政府の高官たちは、アフガニスタン社会に関する基本的な理解さえ殆どなく、1989年にカブールのアメリカ大使館が閉鎖されて以来、現地を訪れたことのある者もいなかった。そして、アフガニスタンの歴史、部族間の力関係、民族的、宗教的な対立に当惑させられるばかりだったようである。本書の重要なメッセージのいくつかを以下に紹介する。

まず、アフガニスタン軍と警察の構築であるが、「国防総省はアフガニスタン軍を米軍の複製として設計するという根本的な間違いを犯した。アメリカとは文化や一般国民の知識に大きな違いがあるにも関わらず、アメリカと同じ規則、慣習、仕組みを採用するよう強制した。アフガニスタン人の新兵のほぼ全員が、数十年にわたる混乱の中で、基礎教育を受けることができなかつたため、およそ80～90%は読み書きができなかつた。中には数を数えられなかつたり、色が分からなかつたりする者もいた。それでも、アメリカ人は彼らに、パワーポイントでのプレゼンを理解し、複雑な兵器システムを運用することを期待していた」(p.66)や、「収入が少なかつたこともあり、多くの警察官は、保護するはずの人々から賄賂を強要する、ゆすり屋になった。……制服を着て、バッジと銃を持った警察官が国の法律を執行するという考え方は、大部分のアフガニスタン人にとって、特に地方に住むアフガニスタン人にとって、なじまない概念だった」(p.76)といった具合で、そもそもの理解、認識が間違ったまま、殆ど達成不可能な任務を遂行しようとしていたことが分かる。

次に、敵（タリバン）との戦い方については、「アメリカ人はいつも急いでいたので、焦りを抑えて黙って見ているのは難しかった。『アメリカ人にとって時間はとても重要なものだ』……『しかし向こうでは、時間には何の意味もない。我々の時間に合わせて物事をさせようとしても、彼らにはそれが理解できない。彼らの多くは時計を持っておらず、時計の見方も分からない。決まった時間に任務に向けて出発させようとしても、彼らにはその理由が分からない』」(p.84)といったアメリカ人の少佐の証言がある。「戦争開始から5年、米軍は依然として敵に対する理解、そして彼らが戦う動機についての理解を欠いていた」という記述とともに、ある米陸軍の准将がアフガニスタン軍の将軍に「タリバンについて教えてください」と教を乞うて、返ってきた言葉「どのタリバンのことを言っているのかね……タリバンには3種類ある。どのタリバンについて聞きたいのか言ってみなさい」は非常に興味深い。「将軍はアメリカ人の盟友に次のように説明した……一つめのタリバンは『過激なテロリスト』、もう一つのグループは『自分たちだけのために参加』している人々、残りの一つは『他の二つのグループの影響を受けた貧しい人々、無知な人々』だ。……『何か重要なことを成し遂げたいのなら、二つのグループを、貧しい人々、無知な人々から切り離すことだ。そうすれば、アフガニス

タンで安定と繁栄を手に入れることができるだろう』とアフガニスタンの将軍は言った」(p.117-118)とあり、当のアメリカ人准将はその説明に納得感を得たものの、こうした見方・分析はワシントンの高官たちには伝わらなかった(響かなかった)。このように洞察力のあるアフガニスタン人将軍の言葉をよく理解して現地での活動方針を見直せば、その後の展開がかなりいい方向に変わったのではないかと惜しまれる。

アメリカ政府当局の推計によると、2006年時点でケシがアフガニスタンの全経済生産高(GDP)の1/3を占め、世界のアヘンの80~90%を供給していたというが、2006年に行われた2か月に亘るアヘン根絶作戦(リバーダンス作戦)も完全に失敗している。「ケシを棒で叩いていた人々の大部分が持ち場を離れた。アフガニスタン政府のためにこの植物を根絶やしにするよりも、農民のためにアヘンを収穫する方が、はるかに大金を稼ぐことが分かったからだ。農民は政府の5倍の賃金を現金または麻薬で支払った。……大失敗を隠蔽するため、アフガニスタン政府当局者は、何エーカーのケシ畑を潰したかについて、公の報告書で嘘をつき、結果を数倍に誇張した。……リバーダンス作戦は、ヘルマンド州のケシ農家を激怒させることには成功した。……多くの人々が、自分たちの生計を台無しにしたとアメリカ人を非難した」(p.150-151)とのことで、この作戦は全くアフガニスタン人から受け入れられなかった。

また、「アメリカ政府当局は困惑した。アフガニスタン政府の盟友たちが、ヘルマンド州のアヘンから生まれる利益の多くをポケットに入れ、麻薬取引の競争相手をやっつけるためにリバーダンス作戦を利用していることが明らかになったからだ。……アフガニスタン警察は、農民が畑で行っているケシ栽培を目益しすることと引き換えに、農民に賄賂を要求した。……このアヘン根絶作戦は主に、政治的つながりや賄賂を支払うためのお金がない貧しい農民に打撃を与えた。阻害された極貧の彼らは、タリバンにとって完璧な新兵となった」(p.151-152)とあるように、リバーダンス作戦はこの戦争で最大の戦略的失敗の一つとなったのである。

因みに、「ニュー・ヨーク・タイムズ」に掲載された記事<sup>1</sup>によると、2022年4月3日にタリバン政権はケシ栽培を非合法化し、違反者にはシャリア(イスラム法)の下に処罰すると発表した。しかし、タリバン政権がケシ栽培禁止を強行することで、内戦の間は味方だった南部地域(カンダハール州、ヘルマンド州、ニムロズ州)の農民や有力者が同政権から離れていく可能性もある。更に厄介なのは、2014年頃から普及し始めた高効率のソーラー・パネルを搭載したウォーター・ポンプは、急速に減少している砂漠の帯水層の奥深くから揚水することができ、ソーラー・パネルは、アフガニスタン南部のケシ栽培地帯の農家が毎年のアヘンの豊作に資する一方で、地下水位の急激な低下という問題を引き起こしているという点である。ケシ農家によるソーラー・パネル利用の普及により、アヘンの撲滅がこれまで以上に困難になりかねないという新たな問題に直

---

<sup>1</sup> The New York Times “*Green Energy Complicates the Taliban’s New Battle Against Opium*”, published May 29, 2022, updated May 31, 2022.

面するとともに、脱炭素の一環としての（先進国の支援、押付けによる途上国での）グリーン・エネルギーへの移行は、アフガニスタンにおいても予期しなかった悪影響をもたらしていると言える。

アフガニスタンへのアメリカの復興援助額は年々拡大し、2010年時点で既にアフガニスタンが自力で生み出すGDPと同じ規模の資金を送り込み、拙速に支出した結果、アメリカ政府は、アフガニスタンが有効に消化できるよりもはるかに多額のお金を注ぎ込んでいたことになる。本書では、「アメリカ政府当局は、アフガニスタン人が必要としない、又は望んでもいないプロジェクトに莫大な金額を浪費した。資金の多くは、請負業者や腐敗したアフガニスタン政府当局者のポケットに入った。一方、アメリカが資金提供した学校、診療所、道路は、——仮に建設されたとしても——工事やメンテナンスがよい加減だったために荒廃した。……ある USAID 職員は、資金が使われた案件の90%は過剰だったと推定した。『我々は客観的な判断力を失っていた。資金を与えられ、それを使うように言われたからそうした。なんの理由もなく』とインタビューで語った」（p.180-181）と記している。更に、「アメリカはダムや高速道路に『我々が支出できることを示すために』資金を惜しみなく支出した。……しかも、世界で最も貧しく、最も教育を受けていないアフガニスタン国民には、一度完成した大規模プロジェクトを維持できないことが分かっていたのに」と語ったある中将の言葉（p.181）も記されている。

アフガニスタン全体での腐敗の蔓延に関しては、「窃盗行為がかつてないほど定着する中、……アメリカ政府当局は最悪の犯罪者——政治家、軍閥指導者、麻薬密売人、防衛請負業者——を容認した。彼らはアメリカの同盟相手だったからだ。結局、アメリカ政府当局はアフガニスタンの権力構造全体があまりにも腐敗していたため、浄化することは不可能な任務であると判断した」（p.210）としつつ、「アメリカの援助と防衛案件契約への支出は、貧しいアフガニスタンが消化できる額をはるかに超えていたため、賄賂と不正を行う無限の機会が生じた」（p.210）ことを認めている。また、「アフガニスタンで米軍と NATO 軍を支援する契約が急増したことは、恐喝、賄賂、リベートが根付くことを事実上保証してしまったという。腐敗があまりにも広まったため、アメリカの使命にとって、タリバンよりも大きな脅威となった」（p.211）という、カブールでアメリカの上級外交官を務めた人物の言葉とともに、「忠誠心と情報をカネで手に入れるため、CIA は軍閥指導者、知事、国会議員、更には宗教指導者にさえ現金を注ぎ込んだ。米軍やその他の機関もまた、見当違いの安定を追求する中で、アフガニスタンのいかがわしい有力者にカネを払ったり、契約を交わしたりすることで腐敗を助長した」（p.211）と、アメリカ政府当局も手を汚していたことを明らかにしている。

過去の失敗に学ばないどころか、意図的にアメリカ政府自らが仕掛けて、大金をつぎ込み、いたずらに戦争を長引かせていた節があるが、表向きの理由付けや正当化とは異なり、特定の支配層（国際金融資本、ネオコン、軍需産業等）の利益やビジネス（金儲け）の方が優先されていたことを示唆する内容である。また、2021年8月15日のカブール陥落を受けたバイデン大統領の演説で、「Our mission in Afghanistan was never

supposed to have been nation building. It was never supposed to be creating a unified, centralized democracy.」<sup>2</sup>と発言するに至る背景を教えてくれるものでもある。いずれにしても、渾身の力で調査・取材し、アメリカの暗部を克明に暴き出した本書は価値ある一冊である。

---

<sup>2</sup> 2021年8月16日にホワイトハウスのホームページ（Briefing Room）に掲載された“Remarks by President Biden on Afghanistan”の第5パラグラフ。